

# 「私と中国研究——中国・魯迅との出会い」

尾 上 兼 英

私は中国文学・中国文化を担当している教員で、小島先生のように「歴史学から見た日中関係」のような刺激のいっぱいある、そういう報告はできませんので、大変個人的なことを話させていただきます。

## 五十年前の日本——無条件降伏による発見

日中関係一〇〇年と申しますと、私はその半分以上生きてきたということになります。そこで、すこし回顧談におつきあいください。

一九四五年八月に日本は連合国に対して無条件降伏をしました。いま振り返ってみると五十年以上になりますが、その時の五十年前にはなにがあったのかと年表を開いてみると、一八九五（明治二八）年三月に下関で伊藤博文・陸奥宗光と李鴻章とが日清戦争の講和談判を開いております。日清戦争といえば、我々にも神話時代に近いような遠い昔のように思われます。御出席のお若い方々には、日本の降伏というのは、我々が日清戦争に感じるように神話時代のように思われることでしょう。そのころ、私は十八才で旧制高等学校

校の一年生でした。上陸したアメリカの戦車の下に潜り込んで爆破する訓練が日常となっていた時で、もはや日本の将来が見えていました。日本軍の戦術は一度成功すると繰り返すことにありました。特攻隊がその好い例です。忽ち相手は対抗手段を講じます。それでも繰り返し、失敗を重ねます。特攻隊員には我々よりもっと日本の将来が見えていたでしょう。かれらは黙って死にました。

ところが、名誉の戦死こそが男の生き甲斐といった人が、敗戦を境に、諸君こそが戦後復興の担い手であるといい出し、戸惑ったのは当然というのはおわかりいただけると思います。その時に私が得た教訓は、立派そうなことを偉そうにいう人は信用してはならない。これは今も続いております。

その時に、私の課題となったのは、次の二つでした。一つは、日本語を廃止して、国語はフランス語にせよという志賀直哉氏らの提案でした。敗戦とは自分の言

葉まで失うのか、これには大変なショックを受けました。これについては後ですこし補足をします。

第二は、十五年戦争に耐え抜いた中国人とはどういう民族なのか？という恐れにも似た疑問でした。当時、洞庭湖付近の守備隊にいて復員した従兄は、「戦争が終った」と聞いた時に、ついに蒋介石も手を挙げたかと思つて喜び勇んで山から下りてきたそうです。この頃は対峙しているが、とくに激しい戦闘はなく、日本軍優勢と思ひ込んでいたといっていました。

第一の問題は立ち消えになったのですが、第二の方はおいそれと答えが出ることではないので、抱えたまま一九四九年に大学の中国文学科に入学しました。この年の十月一日に中華人民共和国の建国宣言がされたので、卒業すればすぐにも留学することができ、第二の疑問に取り組めると、単純に喜んだものでした。

卒業したのは一九五二年、昭和二十七年というのは先輩の方は御記憶にあらうかと思うのですが、いわゆ

る「血のメーデー」に遭遇し、皇居前広場に突入した

デモ隊が警官隊の発砲によって、ふたりの死者を出しました。私のいた中国文学科では魯迅の有名な「血債

——血の債務は必ず同一物で償われねばならぬ。支払いが遅れば遅れるほど、一層高い利息をつけなければならぬ」ということば、これは一九二六年に、馮玉章の国民軍と張作霖軍との戦闘に日本軍が干渉し、段祺瑞政府に請願に行ったデモ隊に対し、國務院の前で発砲、学生ら四十八人が虐殺された事件に対する魯迅の憤りのことばです。（一九八九年六月四日の天安門事件の際にも、各大学の門前の死者を弔う花輪に、このことばが添えられていました）非常に似た状況なので、この言葉をプラカードに書いてデモにゆくのは適切であったと思うのですが、偉い人の言葉をそのまま自分の言葉とするのには抵抗感がありました。

これを契機に、魯迅を鍵に第二の疑問を解こうと思つたのが、私の研究の第一歩となりました。これに

ついても、あとでお話したいと思います。

### 一三〇年前の日本——明治維新政府の近代化政策

そこで、第一の問題にもどりますが、一三〇年前の日本とレジユメに書いたのは明治維新政府ができた時の意味のつもりです。この時を契機に、第一の問題について考えたことを申しあげたいと思います。幕藩体制というのは、いわば地方分権という制度と理解しておりますが、江戸幕府を打倒して近代的中央集権政府をつくるために、維新派が最初に着手したのは、首脳部がそろって、ヨーロッパ諸国の視察に出かけることでした。それは岩倉訪欧使節団と呼ばれておりますが、岩倉具視は、明治四年から明治六年までの外遊中いっさい何もするなといひ残して出かけました。ところが、留守をあずかる西郷隆盛は征韓論にくみし、アジアへの侵略を開始しようとしています。これは明治一〇年の「西

南の役」で一応圧殺されますが、明治二七年には実行に移されます。その準備として、維新政府はヨーロッパモデルの、天皇を頂点とする王室体制を日本にもちこみ、全面欧化を進めました。ヨーロッパの繁栄を日本に移植するためには、ヨーロッパを模範とし、追いつき追い越せが目標です。ヨーロッパの繁栄が植民地獲得にあつたことも目標に取り入れられ国策となります。それは、韓国併合、「満州」への侵略という、その後の日本の進路を見れば、歴然としております。

日本の伝統、伝統と呼ぶにふさわしいかどうか疑問ですが、それを捨てて、日本をヨーロッパにするのが日本の近代化への道の結論でした。それを背後から援助したのは、慶応義塾を創立した福沢諭吉です。鹿鳴館時代と呼ばれるらんちき騒ぎ（招待宴・舞踏会）は、その象徴といえましょう。徳川慶喜の「大政奉還」によって、古いしがらみを断ち切っているだけに効率よく近代化は進められました。それ故に大国清国

に勝利できたのであろうと思うのですが、いかがでしょうか。

中国はアヘン戦争の痛手からヨーロッパの軍事力を取り入れようとはしましたが、その基本方針は「中体西用」でした。中国文明の上にヨーロッパの技術を接ぎ木することで十分と考えたのでしよう。中国の近代文学の父とよんでよい魯迅という人が「中国では机一つ動かすにも血を見ずにはすまない」といつているのですが、それは三千年の文化に対する自信と誇りに裏打ちされた保守性との闘いだからです。

日本は古くから優れた文化を導入することに熱心でした。明治維新前は中国、以後はヨーロッパです。中国と違って、立派な日本座敷の隣に洋式の応接間を作ることに抵抗感はありませんでした。

明治時代に森有礼が国語として英語採用論をとなえ、かえってお雇い外国人のホイットニーにたしなめられたりしております。戦後に国語をフランス語に

せよというのも、全面洋化の線上にあるように思われます。民族のアイデンティティは言語と宗教・民族を抜きにしては考えられないと思うのですが、超エリートには、恐ろしいことに、日本語はいともたやすく放棄できるものとされていたわけです。もちろんヨーロッパに追隨するためです。

それに対して、中国は「中学」（三千年の伝統文化）を土台に「西用」（ヨーロッパの技術）を導入しようとしてきました。これは失敗しましたが、中国流の近代化路線の設定です。これが失敗したのは当然といえますが、日本が伝統文化を棄ててヨーロッパになろうとしたのと比較すると、日中間の理解は容易ではないと思います。ただし、自主的判断を棄てて大国を模倣し、追い越せば一段とすぐれた近代化が達成できるというのは安易な方法です。

## 魯迅との出会い

魯迅の問題は一筋縄ではいかなかったのですが、すぐれた先達がいました。竹内好という人です。昭和一九年に『魯迅』という本を公刊しております。その前年に応召して中国戦線に送られたかれの『魯迅』は、遺書でもあったのでしよう。気合の籠ったもので、日本浪漫派ばりの晦渋な文章には、戦時下で単純化した頭脳で繰り返し読みながら腹立たしくさえ思えたのですが、単純化しない強靱さにうたれました。それに続く戦後の『現代中国論』『日本イデオロギイ』『知識人の課題』などは、賛成しかねると感じる部分もありましたが、魯迅から何を学ぶかの指針となりました。

魯迅に次のような文章があり、初め読んだ時は、同じ内容を言葉を変えていつていると思っただけですが、

きれいごとの好きな学者たちが、どんなに飾り立て

て、歴史を書くときに「漢族発祥の時代」「漢族発達の時代」「漢族中興の時代」などと、立派な題を設けようと、好意はまことにありがたいが、措辞があまりにもまわりくどい。もっと、そのものズバリの言い方が、ここにある――。

一、奴隷になりたくてもなれない時代、

二、当分安全に奴隷になりおおせている時代。

この循環が、つまり「先儒」のいわゆる「一治一乱」でもある。

(松枝茂夫訳「灯火漫筆」、『墳』岩波『魯迅選集』)

これは一見すれば同じことをいつているようですが、ある時、「一治一乱」は、支配者の立場から見た歴史であり、後者は被支配者の立場からの提言であると悟りました。

ここに、天子および支配階級と被支配階級の間をみる視座があると思います。被支配階級の理想の境地

は次のようなものです。

日出でて作(たがや)し、日入りて息(いこ)う、  
井を鑿(うが)って飲み、田を耕して食らう、  
帝力何ぞ我にあらんや (『十八史略』五帝)

これは「帝などと偉そうな顔をして構ってくれなくても、自分たちで必要なことはやっている。お節介はやめてください」というのが被支配階級の民衆の希望であるということです。民衆の眼から見れば「政治とは、奴隷になれるかなれないか」なのです。

これで魯迅の眼のありどころがわかります。中国から建前の発言と本音の発言を見分けるためには、魯迅の足跡を追うのではなく、魯迅の求めたものを追うのが魯迅研究の最も重要な課題ではないでしょうか。私の申したいことはそれに尽きるのですが、御批判をいただきたいと思います。

なお、エドモンド・ヒラリー卿といえば、あのエベレスト（中国ではチョモランマとよびます）に初登頂をしたイギリス隊員ですが、かれはエベレストへの挑戦についての質問に「なぜならば、それがそこにあるからだ」と答えたと伝えられました。その後このことばはよく引用されたものです。たとえば万引をした人の言い訳など。その時私は偉大な壮挙を成し遂げた人物としては、つまらない男だという印象をもちました。

そのことを口に出したところ、イギリス文学専攻の友人にたしなめられました。原語が何であったか記憶にありませんが、たぶん「Because it is there」でしょう。

友人の説によれば「あの“it”は神を指し、畏敬してやまないものを意味するので、あれは誤訳ですよ」とのこと。そこで、ただの登山家に過ぎないという私の不明を恥じ、認識を改めてヒラリー卿を尊敬するようになりました。

こんなことを何故言ったかと申しますと、中国を、

イギリス・アメリカなどと並べて、たまたま中国を研究対象にしたと思われるものが、目につくからであります。「it」がヒラリー卿の意味であるような中国研究家が輩出することを願ってやまないからであります。

## 二十一世紀に向けての覚悟

### ——接ぎ木でない日本のありかた

現在の日本はアメリカ追随という政策で、アジアの一員という自覚に乏しいように思われます。今後の我々の選択はどうあるべきかについての答は、まだ見つかっていないようです。国際基督教大学で武田清子教授が加藤周一・木下順二・丸山真男の三氏を講師に「日本文化のかくれた形へカタ」という題で連続講演会を開いて、その講演記録が岩波同時代ライブラリーの一冊として一九九一年に刊行されております。そのなかで、丸山氏はあたらしい文化の摂取にあたって、

「執拗低音」へ音楽学でいう主旋律に対して、同じメロディを何度も何度も繰り返して、主旋律を微妙に変えるもの——これが伝統というものだと思いますが——それについて指摘しています。

またその「まえがき」で武田氏は和辻哲郎の一九三四年の『日本精神』の一部を紹介していますが、それは「日本人ほど敏感に新しいものを取り入れる民族は他にないとともに、また日本人ほど忠実に古いものを保存する民族も他にないであろう」という日本文化の重層性という特徴を指摘しています。つまり、先にあげた日本座敷の隣に洋式の応接間を作って不思議と感しないなどということだと思われれます。

我々は、こうした日本文化の過去のありかたを見ずえて、将来に向かうべきではないでしょうか。それによつて今後の日中のありかたが見えてくるように思われます。日本の側の「執拗低音」にあたるものには、柳田国男の業績があります。また手前味噌になります

が、神大には常民文化研究所があることを紹介して、終わりとさせていただきます。